

ストリートダンスからフリーターへ ——進路選択のプロセスと下位文化の影響力——

新谷 周平

はじめに

本稿の目的は、若者が「フリーター」を経験するプロセス、およびそれに対する若者集団の下位文化の影響力を描くことによって、先行研究が示してきた政策的示唆に再考を迫ることである。

「高卒無業者」「フリーター」は、90年代を通して増加傾向にある⁽¹⁾。それに対して先行研究は、進路選択と学業達成、出身階層、学校外文化との相関を示すことを通して、それまでスムーズに行われてきたといわれる学校から職業への移行システム(苅谷 1991)の揺らぎを示し、「階層分化、再生産問題」「就職支援問題」「学校教育の正当性問題」としてこの現象を捉えている(耳塚 2001)。そして、必要な政策的対応として奨学金制度の充実や職業発達の促進を提言してきた(耳塚 2000, 日本労働研究機構 2000, 等)。しかしこれらの研究は、提起された政策的対応は有効かという問いに答えることはできないであろう。なぜならば、個人の進路選択プロセスおよびそれに対する下位文化の影響力に光をあててこなかったからだ。フリーターの増加という現象を的確に把握し、有効な政策的示唆を導き出すためには、進路選択のプロセスを捉え、ウィリス(Willis 訳書 1996, 149頁)もいうように、若者の文化的な帰属関係を理解する必要がある。

したがって本稿では、若者集団への参与観察およびインタビューによって、上記目的に迫る。まず、1節では、先行研究を検討し、本稿の課題、方法を設定する。2節では、対象集団の性格を概観した後、若者がフリーターを経験するプロセスお

よびそれに対する学業、階層、文化の介在を5人の若者に即して描く。3節では、そのプロセスの中で見えてきた若者集団の存在とその下位文化の影響力を描く。それらをふまえて4節では、先行研究が導き出してきた政策的な示唆の前提を再考する必要性を提起して結論とする。

1. 先行研究の検討および本研究の課題と方法

1.1. 「高卒無業者」「フリーター」研究

90年代後半以降、「高卒無業者」研究は、高校生対象の質問紙調査や教員対象のインタビューによって、学業達成、出身階層、学校外文化との関係から、無業者の析出要因を明らかにし、それに対する政策的対応を提起してきた。

まず学業達成との関係では、粒来(1997)が、成績が中位にもかかわらず無業者となる層(「進路非収斂」型)の存在を指摘し、「枠づけ」を緩和する改革が一方的に進められることへの異議と学校外部から職業への移行支援システムの構築を提起している。次に生徒の出身階層との関係については、耳塚(2000)が、高校生の進路志望と家庭の社会階層との相関から「業績主義的なアスピレーションの冷却とは別に社会階層的背景がアスピレーションを左右する事実」(62頁)が明らかになったと結論づけ、「奨学金制度などの経済的支援」等の必要性を提起している。さらに、学校外文化との関係については、この20年間の高校生の生活世界に占める学校の比重低下(大多和 2000)が示されているが、なかでもフリーター志望者は、交友関係が学校外に広がり、喫煙、深夜行動等「生徒役割からの逸脱行動」をとる傾向が顕著であり(堀 2000, 44頁)、「今を生きる刹那的な意識が強い者」である(小杉 2000, 52頁)との結果も導き出されている。

これらの研究は、80年代以前と比較して、進学・就職への強いアスピレーションを持たない層の増加による従来の選抜システムの変容を明らかにしている点で重要な知見を示している。しかし、実際に枠づけを強めればフリーターは減るのか、奨学金制度を充実させれば階層差は縮小するのか、なぜフリーター志望者は生徒役割から逸脱する行動をとるのか、といった実効性ある公的関与を実現するとしたら答えるべき疑問には答えられない。なぜならこれらの研究は、学業達成、階層、文化と進路との相関に焦点を当ててきたものの、それらの諸要因がある個人のなかでどのように結びついて進路選択がなされていくかのプロセスには光を当ててこなかったからである⁽²⁾。また、高卒者に限定しているため、中卒者、高校中退者等が捉えられていない。実効性のある政策的対応を提起するためには、多様なフリーターをプ

ストリートダンスからフリーターへ

ロセスとして捉えることが不可欠である。

この点で「フリーター」を対象に据えた日本労働研究機構（2000）は評価できる。この研究は、「フリーター」97人（専門学校、情報誌を通じて募集）へのヒアリングから、契機と意識にもとづいて、フリーターを、①離学モラトリアム型、②離職モラトリアム型、③芸能志向型、④職人・フリーランス志向型、⑤正規雇用志向型、⑥期間限定型、⑦プライベート・トラブル型の7種に類型化し、その上で「個々人の状況に即したきめこまかな対応」が求められるとして、職業発達の促進、職業ガイダンスの充実、正規雇用への移行支援等を提言している。この研究は、多様なフリーターをプロセスとして捉えることに一定程度成功しているといえる。しかし、一時点のヒアリングであること、およびフリーターを個人としてのみ捉えていることの2点を限界として指摘できる。というのは、第一に、後述の質的データが明らかにするように、フリーターになる者たちの志向性はそれを語る時点によって異なるばかりか、語っていることと実際の行動の不一致すらしばしばだからである。第二に、「高卒無業者」研究が指摘するように学校外文化が影響しているのならば、集団としてあるいは集団内部の諸関係の総体としてフリーターという選択を見ていく必要があるからだ。

1.2. 本研究の課題と方法

したがって、本稿では、なぜ若者が「フリーター」という進路を選び取っていくのかを明らかにするために、進路選択に学業達成、階層、文化が介在していくプロセスを見ること、および若者集団の下位文化を描くことを課題として設定する。

上記課題に応えるため本研究では、一つのストリートダンスグループに対する長期にわたる参与観察およびインタビューを行う。ストリートダンスグループを対象とする理由は、多様な学業的、家庭的背景の若者への長期にわたるアクセス可能性である。彼らは、週の決まった時間帯に、決まった場所で活動をする。ストリートダンスというと、日本労働研究機構（2000）のいう芸能志向型のフリーターであると思われるかもしれないが、自らのダンスを「自己マン（自己満足）」と言うインフォーマントの若者たちは、むしろ離職モラトリアム型、離学モラトリアム型、あるいは職人・フリーランス志向型に近い。このグループを対象に、1999年10月から2002年4月まで約2年半の間参与観察を行った⁽³⁾。この期間は、中心メンバーが18歳（高校生でいえば3年生の半ば）から、20歳（同、卒業後2年経過）までである。彼らの多くは、この期間にフリーターを経験している。そのプロセスのなかで、2000年

9月、および2002年3月に録音を伴ったインタビューを実施した(4)。

2. ストリートダンスと進路選択のプロセス

2.1. ストリートダンスの活動とメンバーの構造

ここは、東京から電車で1時間ほどの千葉県のある私鉄駅である。この駅に隣接する百貨店の入口で、火、木、土の週3日、午後9時頃から深夜12時ぐらいまで、ブレイクダンスを練習しているグループがいる。その中心は、同じ普通科高校（下位校）卒の野口とタツヤである。それぞれ中学時代にダンスをはじめた2人は、高校で出会ってから一緒にここでダンスの練習をするようになった。この集団は外部に対して開放的で、その後高校、中学の同級生のほか、クラブで知り合った者、ここに声をかけてダンスをはじめた者、ダンスをする者もしない者も、そして学業達成の高い者も低い者も集まってきた。

しかし、長期にわたる参与観察からは、この場でダンスを継続していく者たちが限られていることがわかる。学校ランクの高い高校に通う者は、一時的に熱心にダンスの練習をしても、中心メンバーからは「あいつはまじめだよ」「上達しない」と一段低く見られており、高校3年生になると受験のために次第にこの場に来なくなる。また、女子は、男子メンバーの恋人となり、別れるとこの場に姿を見せなくなる。その結果、ここで継続的に練習を続けていく者は、相対的に下位の学校あるいは学歴の男子ということになる。

99年12月に最大15人ほどいたメンバーも、2000年の9月には、中心的な5人のメンバーを残して去って行ってしまった。その5人が、野口、タツヤと、タツヤの中学の同級生の織田、島田（ともに中卒）と、2つ学年が下のツトムである。このうち、ツトムを除く4人が、中卒あるいは高卒後にフリーターとなっている（表1）。

表 1

対象者	性別	年齢 *	進路	
			中学卒業後	18歳以後
野口	男	20	公立普通科下位校	フリーター
タツヤ	男	20	公立普通科下位校	フリーター
織田	男	20	中華料理店就職→フリーター	フリーター→整体師学校
島田	男	20	美容師見習い→フリーター	フリーター↔美容師見習い
ツトム	男	18	公立普通科中位校	美術専門学校

*2002年4月1日現在

ストリートダンスからフリーターへ

以降、この5人に焦点を当て、進路選択のプロセス（本節）および、そこに見えてきた若者集団の存在とその文化（3節）を描いていく。

2.2. 進路選択のプロセス——フリーターへの移行、フリーターからの移行

それでは、5人に焦点をあて、学校体験、ダンス、家庭環境がどのように絡み合っていてフリーターへの移行、およびフリーターから職業への移行に影響しているのかを見ていこう。

【野口】 野口は、親戚の八百屋でアルバイトしたお金で中学3年のときにダンススクールに通いはじめた。中学時代は、しばしば学校をサボり「悪いことするから」部活の先生が家に迎えにきていた。小学校の頃から「毎日0点」で、その後も成績は「ずうっとよくなかった」。

高校時代は、「ずっとバイト」だった。週5～6回、学校が終わると午後4時半から午前3時まで親戚の居酒屋でアルバイトをし、4時間ほど寝て学校へ行くという生活で、授業は睡眠の時間になっていた。収入は、ダンススクール代・小遣いのほか家計にも入れており、アルバイト漬けになったのは、父親が「逃走」し、母親が2つの仕事をかけもって、1日18時間働いているという家庭の事情がある。また祖母が同居している。

高校3年の進路選択時には、「行ける余裕がなかったから。……頭に」と進学は考えず、「とりあえず休憩しようと思って」就職もしなかった。卒業後1年半は、アルバイトもろくにやっていた。親もそれに対して何も言わないが、それは、「家でちゃんとやってるから。かあちゃんが働きたがってるから」だと考えている。実際、掃除、洗濯、炊事、祖母の世話を野口が担っていたのである。1日の生活は、「朝9時頃1回起きて、ばあちゃんの様子見て、そんで2時間寝て、お昼頃起きて」、祖母の昼食準備、洗濯、掃除をして休憩。夕方には夕食の用意をしてダンスに行く。そして帰ってきて、朝の4～6時頃就寝する。ダンスの場所には、そこが地元であるタツヤたちと異なり電車で行くため、終電の午後11時過ぎには帰路につく。それゆえ、ダンス後に遊びに行くこともほとんどない。

高校卒業後の彼の進路観は、聞くたびに変わっていった。

「就職は2年後。……でも就職するかも。料理っす」(1999.10.28)

「決めましたよ。役所に。コネで」(1999.11.16)

「経営の専門(学校)も考えてる。まだ学生やりたいし。……社長になりたい」

(2000.4.2)

「冒険家になりますよ」(2000.9.12)

しかし、言葉ではいうものの、実際に就職活動や進学準備をしている様子は見られない。「2年後」と言っていた2002年3月には、「就職はしないっすよ。……就職するなら店やりますね」と答え、今後の展望については「アドリブ人生で」という。お金には困るときもあるが、「あんまお金には目くらまないから。なきゃ我慢」と気にしていない。実際彼は、万引き、無賃乗車、仲間とレストランに入っても一人何も食べないことでお金を「節約」しているのであった。その後、継続的なアルバイトを始めるが、収入は携帯電話、パチンコ等に消え、家に入れるお金も貯金するお金もつくっていない。

【タツヤ】 タツヤもテレビ番組の影響で中学の頃ダンスをはじめ、高校で野口に出会ってから、ストリートでダンスをするようになった。

小学校の頃成績はよかったが、「先生に嫌われるほう」だった。夫婦喧嘩が絶えず、父親はしばしば暴れていた。小学校5年の頃に両親の「別居、離婚」で学校を何度も転校し、喘息のため養護学校に入れられたときには、「捨てられたって思いました」と述べている。

「俺あんま、極端に学校好きじゃないんで」というタツヤは、中学の頃は成績も悪く、部活も「幽霊部員」だった。しかし、「いい先生でしたね」というように、表だって学校に反抗することはなかった。授業もしばしばサボり、たまり場になっていた友達の家に行っていた。そうしたなか、「チーム」(逸脱集団⁽⁵⁾)に、先輩から「強制的」に入れられてしまう。しかし、「薬物とかばっかだったから、楽しくないし」「ダンスやってからつながり消した」。高校に入ってから、しばしば学校をサボり、次第に中学の同級生である織田や島田と遊ぶようになった。

高校3年の進路選択時には、進学準備も就職活動もしていない。進学は、「どうせ家金ねえから」というのもあるし、親は学費出してくれても「あたしが出してんだから、学校行きなさいとか言われんのがすごい苦痛」でやめた。自分で学費を貯めて行こうとも思ったが、「貯まんないっす」。就職についても「なんか辞めづらそうだし、『就職』って言葉が何よりも嫌い」だと、なんら就職活動をしなかった。

そして高校卒業後は、断続的に(とは言っても他のメンバーに比べると比較的継続的に)アルバイトをしながら、ストリートダンスをやるという生活になる。毎日、夕方に起きて、アルバイトかダンスに行く。ダンス、アルバイトが終わる深夜12～1時頃からは、先輩の家やゲーセン、カラオケ等に行き、朝6時ごろ寝る。

ストリートダンスからフリーターへ

将来は、「自分の服屋を持つつもりです」というが、月16万ほどのアルバイト代は、パチンコ、飲み、洋服に消えてしまう。「(親に就職しろとは)言わせないっす……好きなことやりたいから」(2000.9.12)とも言う。そういうタツヤも、ストリーートのメンバーが徐々に離脱し、後述する織田や島田が何らかの道を見つけていくにつれて、「でも就職しなきゃなあ」(2001.6.24)と考え出すが、今後については、「考えてないっすけど、店を開く。……適当に。で、あんま、後先考えずに、生きようみたいな感じですね」(2002.3.12)という。

【織田】 織田は、タツヤ、島田と中学が同じで、卒業後、フリーターをしているときに島田やタツヤと遊ぶようになり、18歳のときストリートダンスに加わるようになった。

中学時代は、2年の途中から、勉強を押しつける親への反発と「(勉強する)目的がわかんない」ことから、まったく学校の授業に行かなくなったが、学校や先生が嫌いなわけではなく、サッカー部の練習にだけは行っていた。「チーム」等逸脱集団には属していない。

高校には進学せず、「料理人になる」と、親の縁故で中華料理店に就職するが、仕事のきつきから1週間でやめてしまう。その後は、ガソリンスタンドや親の経営するカラオケ店などでアルバイトを断続的にするようになる。父親は会社を経営しており、家計は裕福で、家にある外国車を織田が自分のものとして使っている。

そうした織田も、中学卒業後3年経って「なにかやろうかな」(2000.5.2)と考えだし、「技術を身につけた方がいい」という父親の勧めもあって、整体師の学校に通うことになる。2年間の学費約200万は親が出している。必ずしもまじめに通っていたわけではないが、卒業最低限の試験を受けて2002年3月に卒業している。整体師の学校に通ってからは継続的なアルバイトをせずに、親や祖父母からの小遣い(月3万ほど)で生活している。

仕事については、「手に職系っすね。(会社の事務とかは)一切思い浮かばないっすね」と述べ、整体師の就職先を探しており、それを続けて30歳までに独立することを目標としている。将来については、

「とりあえず(見通し)できましたからね。よっぽど何か俺の心を動かすことがない限り、続いてると思いますけど。急におやじの会社で働くことになるかもしれないですしね。……まあ、親が生きてるうちは、そんなに切羽詰って考えなくていいかなって」
(2002.3.8)

と、親の経済的ゆとりもあてにして、他のメンバーと比べると明確な見通しを立てている。

【島田】 島田もタツヤ、織田と同じ中学である。彼は、高校受験時に盗みをしたため不合格になっており、その後も、高校の部室でユニホームを盗む、刺青をして織田の父親の外車で高校に乗りつけて周囲を驚かせるなど、学校を対象とした逸脱行動の主役である。また、会社員であるメンバーの「人生に疲れた」との発言に対して、「リーマンなんかやってっからだよっ!」と、「サラリーマン」への敵意を(冗談交じりではあるものの)示している。

中学時代は、タツヤと同じ「チーム」に属していた。塾と家庭教師をつけていたが、上記を含め3つ受けた高校はすべて不合格で、中学卒業後は、美容師の学校に通いながら、美容師見習いをする。その時期に織田やタツヤと再び遊ぶようになるが、一人暮らしをしながらの美容師見習いのきつさから、両親が経営する美容院で働くようになる。島田の両親は2人とも美容師である。しかし、2000年秋には、「もともとあんま好きじゃないっす」と親の美容院の手伝いもやめ、ガソリンスタンドでアルバイトをするようになる。その後は、フリーターと、親の美容院の手伝いをくり返している。

【ツトム】 ツトムは、他のメンバーと中学・高校は違うが、高校1年のときにメンバーに声をかけてダンスを始めた。野口らの2つ下の学年で、5人の中で唯一フリーターになっていない。

ダンスの練習には毎回まじめに顔を出し、野口やタツヤからダンスを教わっていた。しかし、ダンスの時間以外で他のメンバーと遊ぶことはほとんどなく、「学校あるんで」と11時半ぐらいには家に帰っていた。他の多くのメンバーと異なり、ゲーセンやパチンコにも行かず、タバコも吸わない。それを「たぶんそういう環境になかったんすね」という。

中学時代は「頭、普通よりよかった」が、高校選ぶときに「だんだん頭悪くなって」今の高校にした。高校に入ってから成績は学年で「後ろから10番以内」で、「高校で自信なくしたんす」という。逸脱集団等に属することはなかった。

進路については、「何か作りたい」と、大学と専門学校を迷ったが、「勉強ができない」からと、美術系の専門学校にした。専門学校後の進路はまだ決めていないが、自分の選んだ進路には、「なんか先が見えないから不安」だと思っており、「ダンスの人たちはどうするんすか?」と他のメンバーの将来についても心配している。他のメンバーが自身の将来についてさえ不安を語らないのと対照的である。

ストリートダンスからフリーターへ

溶接技師で海外転勤を繰り返していた父親と小学校のときに死別し、銀行員の母親が女手ひとつで兄弟3人を育ててきたため、家計に余裕はないが、兄2人も大学に進み、ツトムにも母親は大学進学を勧めていたという。

【学校、ダンス、家庭、進路】 ストリートダンサーの若者は、強く学校に反抗するわけではないが、成績の悪さ、勉強の目的がわからないといった理由から、学校外の空間へと流れ出る。そのなかのある者はそのプロセスの中で一度「チーム」等逸脱集団に属すが、そこから抜けて何かをやりはじめるきっかけとしてダンスを選んでいる。また、タツヤは暴力、離婚・別居等で居場所となりえなかった家庭から、野口は家庭の事情からアルバイト漬けであった生活から抜け出しアイデンティティを確保できた空間が、ストリートであったとも言える。

このように学校体験、家庭体験から学校外の空間を拠点とする彼らは、進学・就職のための活動をせずに、容易にフリーターという進路を選択する。その主要な理由は、一方で自分の学力への自信のなさ、他方で就職や進学による拘束への抵抗感である。それが、「就職」「サラリーマン」の全面否定につながっているのである。彼らは、親からの拘束、就職の拘束から逃れて「好きなことやりたいから」とフリーターとなっていくのである。

一度フリーターという状態となった彼らが、その後進学あるいは仕事へと移行していく際にも、その動因として、親の職業・経済力が効いてくるのは確かである。親の経済力のある織田は、整体師学校で資格を得ることで、親が美容師をしている島田は、親の店を手伝うことで将来を見通しているが、他方で、野口、タツヤは、ともに「店を持つ」という夢をもちながらも、何らそのために努力している気配もなく、本人たちも「アドリブ人生で」「あんま、後先考えずに、生きよう」と気楽に考えているようにも見える。

発言に表れる意識に基づいて日本労働研究機構（2000）の類型に当てはめると、野口やタツヤの発言の変遷に見られるように、彼らはその時々、各類型間を移動していくことになる。しかも、実際の行動は、その意識とは無関係に決定されているように見えるのだ。

さらに、「好きなことやりたい」とフリーターを選び、「アドリブ人生」とその後の計画を何らもたない態度は、フリーターが「現実の職業生活と自分との接点を見出せない場合の隠れ蓑として機能」（日本労働研究機構2000、85頁）しているとも解釈されうるだろう。そこから「職業発達の促進」「職業ガイダンス機能の充実」が政策的対応として出されることも当然かもしれない。

しかし、それではなぜ、彼らは、一貫した進路観を持たないでいるのだろうか。「好きなこと」を語りつつ何ら努力しない状態に平気でいられるのだろうか。このことが理解されなければ、導かれる政策的示唆もその有効性を主張できないであろう。

これを理解するためには、個人のプロセスにおける学校体験や家庭的背景の解釈では不十分である。社会階層が効いてくるとしても、けっして経済力だけが効いているのではないのだ。たとえば、ツトムの家庭は、経済的には必ずしも恵まれてはいないが、進学を志向し、将来を展望して今の状況を不安に思っているのである。重要なことは、学校、家庭から離脱したとき彼らのアイデンティティを支えた学校外文化の存在が、その後により、家庭の経済力を越えて効いてくるということである。それゆえ、集団としての下位文化の内実を理解する必要があるのである。

3. 地元若者集団の存在とその文化

3.1. 野口とツトムの脱退

2001年に入ってから、野口、ツトムがそれぞれこの場に来なくなっている。ここには、グループ内の複数の下位文化の存在が示されている。野口は、脱退の理由について、

「(行ったけど誰もいないことは) ありましたよ……やっぱやる気ないから……ただのタムロしてるようにしか見えないっすよね、悪い言い方すると」

(2002.3.21)

と語り、脱退後、自分の地元のストリートダンスグループで練習をするようになった。

ツトムは、専門学校への進学が決まってからこの場に来なくなっている。タバコも吸わず、ゲーセン、パチスロにも行かない彼にとって、このグループは準拠集団にはなっていなかった。そのため、唯一ダンスをする目的のためにこの場へ来ていた彼は、

「もう、(ダンス)やってるって感じじゃないっすね、見た感じ。『たまり場感覚』じゃないっすか」

(2002.3.21)

と、ダンスをメインにやらなくなったことから、この場へ姿を見せなくなったので

ある。

逆にいえば、タツヤ、織田、島田ら中学同級生のグループは、週3回このストリートに集まっており、傍目には「ストリートダンス」のグループであると映るにもかかわらず、実際には、ストリートダンスをメインの目的にしたグループではなかったということなのだ。そして、このことから、このストリートダンスグループとは相対的に異なるが重なり合っている、タツヤらを含みこむ若者集団の姿が見えてきたのである。

3.2. 地元若者集団

タツヤ、織田、島田の3人は、ストリートダンスとは別に、サッカーチーム、先輩の家にとまるグループという2つのグループに属している。そして、この2つのグループは、タツヤらの中学と近隣中学の先輩後輩関係によって成り立っている。

サッカーチームは、織田、島田らの中学と隣の中学のサッカー部の出身者がそれぞれチームを作っているもので、週3回ほど練習をしている。そのメンバーについて織田は言う。

「(このチームには) おかしいやつしかいないっすよ。……大半は高校行かないでとか、そういうやつっすよ。……けっこうプータローとか、ぼっかりっすよ」
(2002.3.8)

また、タツヤは、ダンスの練習後(つまり深夜)に島田などと2つ年上のヒデキの家に遊びに行く。タツヤとヒデキは学校を通したつながりはないが、タツヤはヒデキの「友達の後輩」で、「うちでダラダラ、ゲームするパターンとかが合っていて、……一緒にいるのが増えて遊ぶようになった」(ヒデキ)という。一人暮らしをしているヒデキの家には、「家のないやつとか、住所不定のやつがけっこういる。その「メンツ」は、同じ中学や近隣の中学、地元の知り合いで、「ちょこちょこ入れ替わり立ち替わり来るけど」全部集まると20人ぐらいいるといふ。ヒデキは言う。

「人伝い、時々紹介されたりして、いろいろ遊びをしていくなかで、残っていくのはなんか、少しずつじゃないっすか。で、残ってた仲間だけどんどん親しくなくなっていってて、……なんか、はぐれ者が集まったじゃないっすけど、なんか」
(2002.3.12)

ヒデキはアルバイトもせず、親からお金をもらっていないが、なぜか6万5千円の家賃を払っている。それは「ギャンブル」「食費とかは、誰かしらなんか買って帰って感じで」「まだ親に微妙に甘えてるやつとかもいて、悪いことやってるやつもいて、金はどっかしらから」入ってくる。この場は「秩序の守られたたまり場みたいの」で、「ちゃんとお風呂入るし、掃除するし、共同生活じゃないっすけどなんか」そういうものだという。

3.3. 地元若者集団の文化——「地元つながり文化」

この2つのグループとストリートダンスは、相互に重なり合い、共通の文化を持っているのである。その文化の特徴は、場所の共有、時間感覚、金銭感覚の3点から説明できる。

まず、彼らが、学校や、家庭とは異なる場所を共有しているということである。彼らは、主に同じ中学あるいは近隣の中学の同級生、先輩・後輩である。彼らは、必ずしも現在の学校や、職場、アルバイト先等が同じではないにもかかわらず、共通のたまり場をもち、そこに集まって来ることによって、その関係を維持している。それは、ゲームセンターであり、パチスロであり、ヒデキの家であり、サッカーチームである。そしてストリートダンスもそうしたたまり場の一つなのであった。

そして、その生活圏は、「地元」に限られており、しかも車で移動する。彼らの「東京に行かない」感覚、「電車に乗らない」感覚は、東京から1時間ほどの距離で、東京へ通うサラリーマン、学生が多い地域としても不思議に思えるほどであるし、多くのストリートダンサーが都内のストリート、クラブをメインの活動場所としていることとも異なっている。

「俺、東京に出るきっかけないからほとんど行かないっすもんね、……ほんと半年に1回とかじゃないっすか……車っす。電車じゃ絶対行かないっす」

(2002.3.8)

そして、彼らは将来的にもこの地元に住み続けるという展望を持っている。

「あんま遠く行ってもあれっすよ。俺らとか、地元の友達ばっかじゃないっすか。その友達と遊べなくなるから、ってのもあるんじゃないっすか。近くに住んでんのも」

(2002.3.8)

ストリートダンスからフリーターへ

整体師として勤めはじめようとしている織田でさえも、職場も地元を想定している。

織田「近くで働きます」

筆者「でも、勤めてる整体師の会社にここって言われるんでしょ」

織田「ああ、拒否します。……（それで首になって）も仕方ないかなって」

(2002.3.8)

つまり彼は、職業的達成よりもこの「地元」で生きることを重視しているのだ。

第2に、彼らの時間感覚である。タツヤや織田は、夕方4～5時頃起床する。その後、夜の12時頃までアルバイトやダンス、サッカーの練習に加わり、深夜12時頃から、明け方の4時頃まで、そうしたたまり場で過ごすのである。そうした活動形態を多くの者が共有することで、たまり場が成り立つのである。実際、夜勤の職についていた若者がダンスができないことを理由に退職してフリーターに戻るということもあった。職業よりも仲間との時間の共有が優先されるのである。午後9時～12時というダンスの時間は彼らにとっては、同じ時間を共有するきっかけの時間帯であり、むしろその後の時間がより重要だったのだ。それに対して、野口やツトムは、9時～12時の時間のみタツヤたちとダンスを通して時間を共有するものの、その後の時間を共有することはなかった。

さらに彼らは、予定を立てない。手帳を持つこともなく、遊ぶ予定もその日その日に考える。それは、場を共有している多くの仲間がつねにいることとも関係している。ダンスも練習日は決まっているが、時間はその日ごとに大きく異なり、誰も来ないこともある。ダンスでなくてもどこかで場所と時間を共有していればいいのである。しかし、ダンスを目的とする野口とツトムにしてみたらそれでは来る意味がなくなってしまうのだ。

第3に、金銭感覚である。彼らはグループ内でしばしば他のメンバーに「おごる」。サッカーの練習の後には、そのメンバーでパチスロに行くが、そこでは、

「(お金を) あげたりとかもしょっちゅうあります。あるやつがないやつにあげたりとか……だいたい日曜の飯とかも、あるやつがおごるって感じですよ」

(2002.3.8)

誰がおごるかは、そのときお金を持っているメンバーということになる。たとえば、タツヤは継続的にアルバイトをしているため、コンスタントに一定のお金を所有している。織田は、アルバイトをしていないため、通常親からの小遣い月2～3万程度しかない。そのため、織田の家庭は裕福で、整体師学校の学費200万も親が出しているほどであるにもかかわらず、タツヤがしばしば織田の食事代などをおごるのである。

タツヤ「あいつ（織田）金ないからおごったりとかするじゃないっすか。昨日飯食いいって、心霊スポット探しにいっただけで、6000円ぐらいかかりますからね」
(2002.3.12)

織田「外で食べることも多いつすけど、おごってもらったりしてるし。……タツヤはけっこう使います……タツヤは働いてますからね。あるときはあるとかいって」
(2002.3.8)

また、たまり場であるヒデキの家では、家賃や食費が互いに賄われている。彼らは、その家庭がどれだけ金銭的余裕があるかにかかわらず、その場でお金を持っている者が払うという金銭感覚をもち、それ（金銭感覚および金銭自体も）を共有しているのである。そして、みなそれを当然のことと考えている。

そして、この場所、時間、金銭の共有が、フリーターであることと適合的なのだ。フリーターであることによって場所や時間の共有が可能となり、場所や金銭を共有することでフリーターでの生活が可能になるのである。そしてそれは、「地元」で生きていくことと密接に関わっている。彼らが、場所、時間を共有する人間関係は、同じ中学あるいは近隣の中学の同級生、先輩・後輩である⁽⁶⁾。彼らが活動する範囲も非常に限定されたもので、東京へ出ることもほとんどなく、将来的にもこの地元で生活していこうと考えている。この文化のもとでは、自分でお金を貯めて進学するよりも、今あるお金で仲間におごる方が優先され、職業的達成を図るための条件のいい職場よりも、仲間との関係を維持できる地元の職場が優先されるのである。

こうした場所、時間、金銭の共有という特徴をもった下位文化を「地元つながり文化」と名づけてよいだろう。ここでいう「地元つながり」には二つの意味がある。一つは、彼らが「地元」と呼ぶところの、近隣の中学の同級生・先輩後輩というつながりを基盤にしていることである。それは、高校の同級生でもアルバイトや職場の同僚でもない。もう一つは、彼らがそのつながりによる共同的关系（＝場所・時

ストリートダンスからフリーターへ

間・金銭の共有)を、職業的達成よりも重視していることである。この関係を維持するためにフリーターとなる。もちろん就職する者もいるが、「ダンスができないから」という理由で簡単に辞め、その後探す仕事は、職安等労働行政よりもむしろこのつながりを通して探す傾向がある。反対に、上昇移動、地域移動やそれに伴う職業的達成は、あくまで個人としての移動であり、場所、時間、金銭の共有を不可能にする。つまり「地元つながり文化」から離脱することを意味するのである。この意味で、地元つながり文化は、非移動志向の文化であるといえる(7)。

こうした文化について、野口やツトムは、部分的に共有しながらも相容れないところも多い。とくに、ツトムは、大学進学した2人の兄と自分を比較して将来の見えないことを不安に感じ、他のメンバーがことさら嫌う「サラリーマンになりたい」ともいう。彼はタバコも吸わず、このグループを準拠集団とはしていなかった。他方、野口は彼自身も時間にルーズであるにもかかわらず、タツヤらのルーズさが気に入らない。それは、彼がこの地元集団において場所と時間を共有しているわけではないからなのだ。それゆえ、彼は脱退後、自分の「地元」のダンスグループに属したのである。

4. 結論——知見と示唆

4.1. 知見

進路選択のプロセスおよび若者集団の文化に焦点をあてることによって見えてきたのは、次の事実だった。学校体験からくる彼らの学業への自信のなさや拘束への抵抗感は、決定的に進路選択に影響している。それが進学だけでなく、就職の否定にもつながっており、「好きなことやりたいから」とフリーターになっていくのであった。親の職業、経済力は、フリーターから職業の世界へ移行する要因として効いていた。織田、島田の展望と野口、タツヤの展望は対照的である。

しかし、より重要なのは、そのように親の職業、経済力によって職業的な展望が異なる者たちの間で、場所、時間、金銭を共有することによって成り立つ文化——「地元つながり文化」——が形成されていたことである。そこでは、家庭の経済力とは無関係に金銭のやり取りが行われていたのであった。先行研究の指摘する、喫煙、深夜行動など「生徒役割からの逸脱行動」や「刹那的な意識が強い」特徴も彼らが場所、時間を共有することに付随する性質にすぎない。「職業生活と自分との接点を見出せない場合の隠れ蓑としての機能」として解釈されてきた拘束の忌避と「やりたいこと」志向も、場所、時間を共有し、文化を維持するためなのである。大事な

ことは、彼らが地元つながり文化を形成することで、親の経済力とは独立に、「地元」で生活していくという将来展望を共有していることである。そして、この文化のあり方がフリーターと適合的だったのだ。

さらに、このような文化は若者一般ではなく、特定の社会集団に共有されていると推測できる。すなわち、親が非サラリーマンであることだ。それは決して、社会階層が相対的に低い者ということではない。筒井（2001）は、高校生対象の質問紙調査の統計分析から、従来の「ホワイトカラー＝進路決定／ブルーカラー＝無業者」という図式の修正を主張して、親の職業が「流動的雇用」と「自営業」の者に無業者が多いことを示しているが、筆者の複数のフィールドにおいてもこのことはあてはまる。ストリートに集まる者、なかでもフリーターとなっていく者には親が「会社員」という者が少ない。一方で不安定雇用者、他方で自営業、専門的職業の者が多いのである。それらの者が「進学→長期安定雇用」という上昇移動図式とは異なる文化を持っていると考えられる。

このような文化の作用を見るとき、労働階級の生徒（野郎ども）が自ら労働階級の職業を選びとっていくプロセスを描いたウィリス（Willis 訳書 1996）の研究が想起される。ここで描いた「地元つながり文化」は、「野郎ども」の文化が、反学校的で、労働階級の文化と通じ合うものであるのとは異なり、学校への抵抗はそれほど強いものではないし、階級的、世代的つながりも強固なものを感じさせないが、しかし支配的な文化とは異なる下位文化を媒介にして、相対的に低位とされる状態を自ら選びとっていることは相似している。「野郎ども」にとって、職種よりも職場に「気晴らしができるほどの労働者的な文化があるかどうか」（253頁）が重要なものに対して、本稿の若者にとっては、場所・時間・金銭の共有＝地元つながり文化を維持していけるかどうか重要なのである。

4.2. 文化の解釈と政策的示唆

文化とその作用をこのように理解したとき、どのような政策的な示唆が導かれるだろうか。これまでの研究は、学業達成、階層、学校外文化との関係から、奨学金制度の充実や職業発達促進等の政策的対応を提起してきた。これらの政策的示唆を導出する際の前提の一つは、社会移動における階層間平等である。たしかに、階層間の格差の拡大および固定化が指摘される現在、社会的公正に向けて、この平等基準にもとづく政策的対応は必要である。このフィールドに即して考えても、場所や時間は共有できても進路は共有できない問題性を指摘することもできる。いくら

ストリートダンスからフリーターへ

一時的にそれらを共有しようとも、タツヤと織田では将来展望がまったく異なってしまうのだ。

しかし、この平等観から導かれる奨学金等の政策的示唆は、個人の上昇移動＝地域移動を前提とするため、それとは適合しない文化に属する者に対して利益をもたらさない可能性もある。将来展望が共有できなくても場所、時間、金銭の共有が彼らにとって将来にわたる「資源」ともなりうるのである。ウォルマン (Wallman 訳書 1996) は、一般に過度の不便さや貧困によって定義される地域に住む家庭が、経済的な資源だけではなく、時間、情報、アイデンティティといった資源を編成して、「自分たちの流儀で十分うまくこなして暮らしている」(63頁) ことを示している。家庭の「成功」はよりよい仕事やお金の量、受けた教育、地位の高さなどではなく、「ある環境の中でひとつの『まとまった』資源システムとして家庭がどう機能しているか」(275頁) にかかっているというのである。

そのように考えると、「進学」「就職」という選択もすべての人にとって同様に価値あるものとはならず、その人の置かれた状況によって異なるということになる。ある者にとっては、「進学」よりも明らかに他の資源が重要になるのである。本稿が示してきた場所、時間、金銭を共有する共同的关系も、ウォルマンのいう3つの資源に含まれる。彼らは、これらの資源を自分たちなりに編成しうまくこなしているのである。

しかし、問題なのは、この「うまくこなしている」ことが、同時にアスピレーションの冷却＝構造の再生産に結びついていると解釈されうることである。それは、ウィリスが、「手労働の文化は、一方で自由と満足と体制離脱を表現し、同時に他方では労働する人々を搾取と抑圧の制度に封じこめる」(290頁) と述べたこととも共通する。しかし同時に留意すべきは、そうした再生産プロセスの矛盾構造を指摘するウィリスも、決して「野郎ども」をよりよい就職や進学へ駆り立てることを提言したのではなかったということだ。彼は教員やカウンセラーに対して、良かれと思う働きかけが構造の再生産に寄与する矛盾を念頭に置き、一方で自らの不本意な境遇に気づきはじめた若者には学校教育への復帰を励ましつつも、他の若者たちに対しては「文化なるものに固有の集団的な論理」(438頁) を尊重し、それを職業相談へ生かすべきことも提案している。

奨学金や職業発達支援が不要だということではない。つねにそれらが文化のありようとのような関係に立つのか、ときには矛盾しうることも考慮に入れつつ、プロセスと文化の内実の理解の上に立った支援が模索されねばならない。

〈注〉

- (1) 高卒者に占める無業者の割合は10.0% (2000年), フリーター総数は151万人 (1997年) である。「高卒無業者」とは高卒時点で進学者, 就職者, 死亡・データ不詳の者以外を指し, 「フリーター」は一般に主婦でも学生でもないアルバイト等非正規雇用者を指す。高卒無業者の多くはフリーターか無職であるが, フリーターの中には高卒者以外も含まれる。
- (2) 実際, 耳塚 (2000) の調査では, フリーター志望者中, 学費・学力があれば進学したいという者はわずか2割ほどにとどまっている。
- (3) 筆者は当初, 「大学でストリートで活動している若い人を調査しているのですが」と話しかけ, 以後ダンスを教わるなどしてフィールドに入った。インタビューは, 論文に用いることを伝え, 承諾をとって録音した。なお, 登場人物はすべて仮名である。
- (4) インタビューは, 2000年9月が集団 (野口, タツヤ, 島田) で, 2002年3月が個人 (野口, タツヤ, 織田, ツトム) で行った。集団で行うことにより記憶の信頼性を高め, 個人で行うことによりプライバシーに関わる質問を可能にすると同時に集団インタビュー時との比較から語りの信頼性を確認するためである。なお, 発言内容を事実として用いる場合には, 発言の一貫性, 他のメンバーとの発言内容の一致等からその信頼性をチェックした。
- (5) 「逸脱」とは, その社会や集団に共有されている社会規範に反する現象のことを言う。当然その基準は相対的だが, 本稿では, 現代日本社会における規範を基準として「逸脱」であると考えられるものを指すことにする。その意図は, ストリートダンスのメンバーやフリーターが逸脱的だということにあるのではなく, 一般に逸脱的と考えられる行動や集団がどのような文化の文脈に置かれているかを明らかにすることである。
- (6) 高校生の学校外への友人の広がりや, 逸脱行動や消費文化とのつながりで解釈されてきた (堀 2000, 大多和 2000)。しかし, 高校時代における中学時代の友人は, 「学校外の友人」になるため, 「学校外=地元」という解釈も成り立つ。「学校外=逸脱行動・消費文化」という図式も再考を要するのではないだろうか。
- (7) 「地元つながり文化」は通常, 自宅, ゲーセン, パチスロ等を主要な場としているため, 研究者等外部の者からはアクセスしにくい。本研究においては, 開放的な集団であるストリートダンスが結果的にその文化への入口の役割を果たしたのである。なお, 情報誌および専門学校を通して対象者を募集した日本労働研究機

構（2000）では、捉えることのできなかつた層であるともいえる。

〈文献〉

- 堀有喜衣 2000, 「青年文化と進路展望」耳塚寛明ほか『高卒無業者の教育社会学的研究』平成11～12年度日本学術振興会科学研究費補助金報告書, 40-48頁。
- 苅谷剛彦 1991, 『学校・職業・選抜の社会学』東京大学出版会。
- 小杉礼子 2000, 「フリーター志向と進路展望」耳塚寛明ほか『高卒無業者の教育社会学的研究』平成11～12年度日本学術振興会科学研究費補助金報告書, 49-53頁。
- 耳塚寛明 2000, 「進路分化の規定要因」耳塚寛明ほか『高卒無業者の教育社会学的研究』平成11～12年度日本学術振興会科学研究費補助金報告書, 54-62頁。
- 2001, 「高卒無業者の漸増」矢島正見・耳塚寛明編『変わる若者と職業世界』学文社, 89-104頁。
- 日本労働研究機構 2000, 『フリーターの意識と実態——97人へのヒアリング結果より』調査研究報告書 No.136。
- 大多和直樹 2000, 「生徒文化——学校適応」樋田大二郎ほか編『高校生文化と進路形成の変容』学事出版, 185-213頁。
- 粒来香 1997, 「高卒無業者層の研究」『教育社会学研究』第61集, 185-209頁。
- 筒井美紀 2001, 「無業者：不安定雇用のジェンダー化された再生産」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第41巻, 134-137頁。
- Wallman, Sandra 1984, 福井正子訳『家庭の三つの資源』河出書房新社, 1996。
- Willis, Paul E. 1977, 熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども』ちくま学芸文庫, 1996。

ABSTRACT

**From Street-dancer to *Freeter*:
Future Courses and Subculture of a Youth Group**

ARAYA, Shuhei

Graduate School, University of Tokyo

7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0033 Japan

pp17027@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp

The increasing number of *mugyosha* or *freeter* has frequently been pointed out in Japan. These terms refer to people who, after graduation from junior or senior high school, don't go on to either college or to full-time jobs. Educational sociology researches have made clear the correlation between career perspectives and academic achievement, social stratification, and youth subculture through questionnaires and interviews. Some authors have suggested offering scholarships or opportunities for career development. However, are such suggestions effective? Past researches have failed to answer this question, either because they did not make clear the process of choosing future courses or see the influences of subculture upon such choices.

The purpose of this paper is to describe the process of making future choices, and to make clear the relationship between subculture and future courses. The method adopted is participant observation and interviews of a youth group, specifically a group of street dancers. The members did not aim to be professional dancers, and became *freeter*.

The following findings were made. A lack of confidence in academic abilities and strong resistance to becoming constricted kept them away from college and full-time jobs. The amount of wealth and the occupation of their parents had an influence on the transition from *freeter* to college student or full-time worker. But it was more important that youth who remained in a local area formed a subculture, or "local relationship culture," in which place, time and money were jointly owned. The status of *freeter* was appropriate for this subculture.

If the function of culture is taken into consideration, the effectiveness of suggestions that presuppose social mobility and movement between regions, such as scholarships or career development programs, becomes uncertain. It is necessary to make clear the real state of subculture and to work out programs appropriate to it.